



TITLE:

宇宙を観る, 人生を観る : 巻頭随筆 :
"極地探検のこと"など

AUTHOR(S):

山本, 一清

CITATION:

山本, 一清. 宇宙を観る, 人生を観る : 巻頭随筆 : "極地探検のこと"など.
天界 1941, 21(241): 201-203

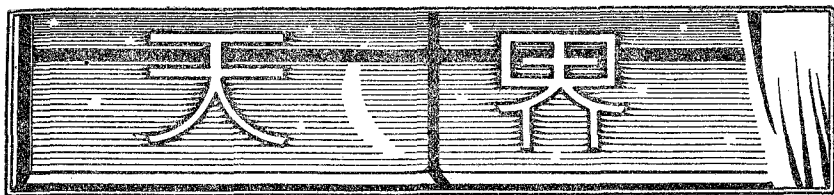
ISSUE DATE:

1941-06-01

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/168226>

RIGHT:



第241號 (第 21 卷)

(昭和16年) 7 月 號

卷頭

宇宙を觀る，人生を觀る

隨筆

山 本 一 清

〔“極地探検のこと” など〕

こんど“アムンゼン”の傳記を書いて、新潮社から出版した。何の間違ひからか知らないが、自分を三高教授として廣告した新聞があつたので、同名異人と思はれたり、三高へ聞き合はせがあつた由、無理もないことである。——極地探検といふことは、やはり宇宙眞理の探究の一方面であつて、自分は以前から特別な關心を持ち、若干の材料も蒐めてゐるので、昨年秋、新潮社から話があつた時にも、承諾したのだつた。そして、アムンゼンを中心としたことは、一度、神戸の例会で講演し、又、西宮や京都でもやつたことがある。尤も、自分が極地探検に興味を持つてゐるのは、只、單なる學的兴趣であつて、決して自身が探検に出かけて行きたいはらではない。しかし、戦争といふものが、人類生活の典型的な一場面を表はしてゐるやうに、極地探検といふことも、眞理探求の典型的な一例として、よく々々其の内容と外形とを味はつて見るべきものと平生から考へてゐる。

アムンゼンは日本へ來たこともある。それは彼の死の一年前、即ち1927年であつた。當時、自分は外地へ出張中で、直接に遭ふことは出来なかつたけれど、其の風采や業績や、世評などは、ヤーキース天文臺のリー博士などから度々聞いたこともある。自分の皆既日食遠征に關する興味や手法はアムンゼンの探検術に勵まされる點が多いことを茲に告白する次第である。

アムンゼンが學界に遺した業績は地磁氣の觀測と研究とであつた。此の業績は、彼の死後十餘年を経た今日、未だ全部發表されてゐず、オスロのアカデミの文庫中に保存されてゐる。アムンゼンの先師はナンゼン博士であつた。ナンゼンはアムンゼンほど派手ではなかつたけれど、グリーンランド横斷や、北氷洋漂流計畫や、北極への徒歩突進などによつて、其の眞理探求に對する熱心と聰明とは伺はれる。晩年彼は國際聯盟の囑託を受けて、哀れむべきアルメニヤ人

の救済に従事した一面は、又、其の人類愛の貴い表はれと見ることが出来る。

アムンゼンより百何十年も前、南極洋を一週した偉傑はキャプテン・クであつた。しかも彼れが最初に遠洋へ乗り出したのは、1768年9月3日の金星の太陽面通過を、南太平洋のタヒチ島で観測した時である。それから彼れの南洋探検が始まつたのである。探検と天文學との關係の深いことが茲でも暗示されてゐる。

いつかは、自分は、ナンゼンとクとの傳記を書いて見たいと思つてゐる。それに、コロンブスの資料も多少持つてゐるので、之れも、何とかものにしたいと思ふ。——アムンゼンが死んで、最近年は南極や北極の探検は非常に賑やかなビジネスになつて了つた。時勢の變化といふものは、こんなものか！ 今日のような戦時では、各國に餘裕はあるまいが、2〜3年前までは、北極の附近に出かけてゐる探検隊が二三十もあるといふ有様であつたのだから、もはや探検も芝居がかりの英雄時代は済んで了つたと言つて好からう。それにしても、我が日本の人々が誰一人こうした極地探検に従事してゐないのは残念である。▲今年も、下半期に入ると、火星がやつて来る、日蝕も近づく、金星も現はれて来る。何だか、急に忙がしくなつて來たやうに感じる。今年の火星は、赤緯が高いので、一昨年のときのやうな苦勞をしないで、比較的に愉快的な観測が出来るだろう。一昨年のときほどの多人數のメンバは不要であらうけれど、伊達課長の統制の下に、10人ばかりの熱心家が、奮闘されんことを望む。

火星を観測する人は、日蝕を斷念しなければならぬ。日蝕？或は火星か？だ。日蝕は昭和11年に北海道で可なり多くの人々が實視したのだから、あの年に、何かの都合で見なかつた人々だけが出かけたら好からう。

こんどの皆既日蝕は、一寸、地圖だけ見ると、北海道の場合よりも、よほど良い観測地がありさうだけれど、實は、さうでない。皆既線は、中央アジアから支那の中部を横斷して、臺灣や琉球にやつて來るのだけれど、よく調べて見ると、中央アジアのロシア領は、なにぶんにも遠い外國のことであるから、少々面倒である。奥支那は、蔣介石や中共の地盤であるから、普通の日本人には全く駄目。次ぎに武漢方面から東支那海岸方面も、さて行くとなると、事實上の困難が多く、特に現下の國策上、此の地方へ出かけることは、官民共に、ひかへた方がよいといふ狀勢である。殊に、天氣の點から見ても、五分五分の成功率しか無いやうな此の種の仕事だから。最後に、臺灣と琉球とだが、臺灣では、有名な天氣惡のため、基隆は90%まで望みは無い。臺北市は皆既線外である。淡水では Grazing contact だが、こゝへ行く人はよほど物好き者だろう。

只、琉球の石垣島だけは、観測地として普通の日本人が容易に行き得る可能性はある。鹿児島からでも、基隆からでも、船の便はある。しかし、行つて滞

在中のこと、颱風のこと等考へると、何だか心細くならざるを得ない。

どうも、北海道の時に比べて、今回の日蝕行は百倍ぐらゐの困難があると思はれてならない。勿論、豪華船に乗つて、=ウヨーク經由で往復し得る南米ペルルの比ではない。——むしろ、學術に殉ずる熱心のあるものは、進んでロシアに入るべきだと思ふ。日ソ中立條約の結ばれた今は、決してソ聯が日本の敵ではないのだから。(1941—5—3)

日本に於ける彗星發見の年月日と、發見者及び彗星名

(天界 226 號に載せたものの訂正と増補です)

1. 1903年7月15日、新彗星(“ボレリ”), 横濱市, (故)井上四郎氏.
2. 1919年10月19日、新彗星(“メトカルフ”), 京都大學天文臺, (故)佐々木哲夫氏.
3. 1919年10月26日、新彗星(“フィンレイ彗星”), 京都大學天文臺, (故)佐々木哲夫氏.
4. 1920年5月25日, “第二テムペル彗星”, 京都大學天文臺, 百濟教猷氏.
5. 1922年11月29日, “ペライン彗星”, 京都大學天文臺, 中村要氏.
6. 1925年6月, “第二テムペル彗星”, 大阪市, 百濟教猷氏.
7. 1925年12月3日, 新彗星(“ベルテア・キルク”), 長野縣, 田中靜人氏.
8. 1928年10月28日, 新彗星, 水澤緯度觀測所, 山崎正光氏.
9. 1930年11月13日, 新彗星, 京都大學花山天文臺, (故)中村 要氏.
10. 1932年7月17日, 新彗星, 米國加州ブローリ村, (故)長田政二氏.
11. 1936年7月17日, 新彗星, 東京, 下保 茂氏.
12. 1937年1月31日, “ダニエル彗星”, 靜岡縣島田町, 清水眞一氏.
13. 1937年9月13日, “エンケ彗星”, 廣島縣, 本田 實氏.
14. 1939年4月23日, 新彗星(“ハセル”), 倉敷天文臺, 岡林滋樹氏.
15. 1939年11月13日, 新彗星(“フレンド”), 倉敷天文臺, 岡林滋樹氏.
16. 1940年10月1日, 新彗星, 倉敷天文臺, 岡林滋樹氏.
17. 1940年10月4日, 新彗星(“岡林”), 廣島縣, 本田 實氏.
18. 1941年1月21日, 新彗星(“フレンド”), “ 本田 實氏.
19. 1941年2月3日, 新彗星(“パラスケラ”), “ 本田 實氏.
20. 1941年2月5日, 新彗星(“パラスケラ”), 長野縣, 金森丁壽氏.

(以 上)